西 ノ 平 遺 跡

－店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１２

安中市埋蔵文化財発掘調査団

例　　言

1　本書は株式会社オサカベ自動車工業が計画した自動車整備工場新設工事に伴う西ノ平遺跡（略称Ｈ－４）の発掘調査報告書である。

2　西ノ平遺跡は安中市岩井字西ノ平834-1他に所在する。

3　確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成23年度に安中市教育委員会（学習の森文化財係）が実施し、本調査及び遺物整理は原因者負担により、安中市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長中澤四郎）が委託を受けて実施した。

事務局　　佐俣信之（副団長）、佐藤房之（事務局長）
　　藤巻正勝（事務局次長）、蜂須賀まゆみ（経理担当）
調査担当　井上慎也（試掘調査・発掘調査・資料整理担当）
発掘調査従事者　今井保美、岩井英雄、高澤はつ江、竹井五郎、遠間宰吉、野口義則、村椿　健

4　試掘調査は、平成23年７月21日・22日、発掘調査は同年10月11日から17日にそれぞれ実施した。資料整理は、発掘調査終了後、平成24年１月31日までの間、断続的に実施した。

5　本書の編集・執筆は、井上が行った。資料整理は、井上、高澤、田川真知が行い、大月圭子、町田千明、大手啓子の協力を得た。古代土器については、三浦京子氏にご教示を得た。

6　遺構の写真撮影、遺物実測、写真撮影、遺構図作成は、井上が行った。

7　発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

8　発掘調査に際して長壁　憲氏には埋蔵文化財についてのご理解と調査へのご協力をいただきました。記して感謝いたします。

凡　　例

1　遺構の実測図は1/80を基本とした。微細図は1/40とした。

2　遺構図中の北マークは磁北である。座標値は旧日本測地系である。
　本文中で使用した地図は、国土地理院発行の地形図「富岡」(1/50,000)、安中市都市計画地図（1/2,500）である。

3　遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
　土器・瓦・鉄滓：１／４（●は須恵器、●は酸化焼成焔須恵器を示す。塗りは黒色処理を示す。）

4　遺構図及び遺物実測図の凡例、記号、略称等は、安中市の報告書基準に準じている。

目　　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経過……　1
Ⅱ　調査の方法と経過……　1
Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境……　3
Ⅳ　遺構と遺物……　4
Ⅴ　成果と問題点……　8
写真図版
抄録

Ⅰ　調査に至る経過

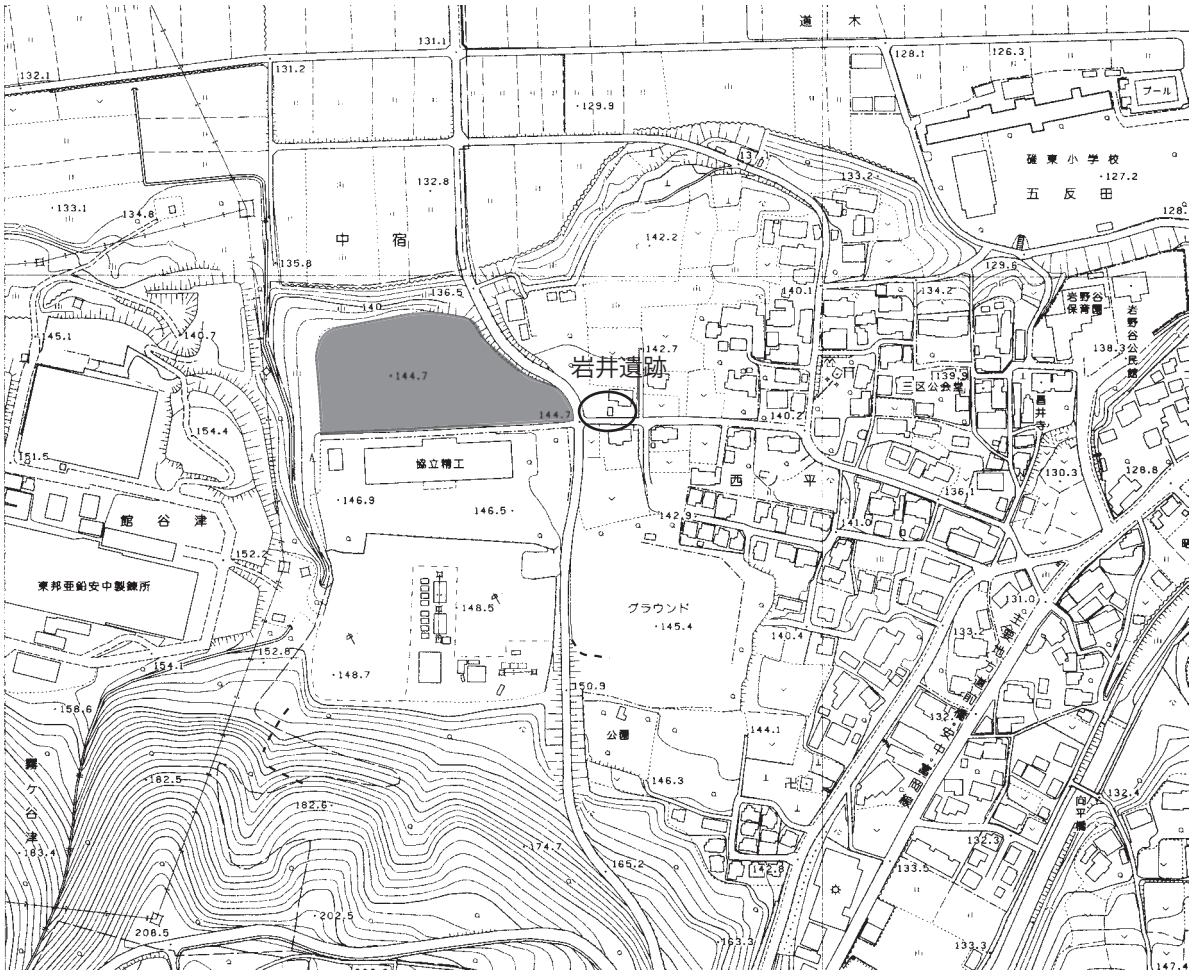
平成23年６月30日、安中市地域開発対策委員会より、株式会社オサカベ自動車工業が計画する自動車整備工場新設工事予定地の埋蔵文化財の状況についての問い合わせが安中市教育委員会（以下市教委）にあった。該当地は、埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、東側に岩井遺跡（市№501）及び岩井西ノ平古墳群、西側には、城館址（舘谷津館）がそれぞれ存在することから、計画地における遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施する必要の旨を協議書を通じて回答した。７月７日、開発者側から試掘調査依頼書が、市教委に提出された。７月21・22日、市教委が試掘調査を実施し、古代住居址が検出され、計画地に遺跡が存在することが明らかとなった。これにより、周知の埋蔵文化財包蔵地の変更が必要となり、７月21日付けで法95条に基づき、包蔵地の変更を県教委へ報告した。７月26日付けで県教委より包蔵地の変更決定の通知があった。その後、開発者側と市教委の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。計画地の変更等は困難であったが、工事による掘削が遺構面までに達する部分が少なく、広範囲で盛土を行うため、保護層が確保できる見通しであることから、工事に先立ち、発見された遺構と現状保存が不可能な部分については、発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。８月２日、必要書類（法93条届出）が提出され、８月26日付で「発掘調査」の指示を通知した。その後発掘調査に向けての協議・調整を行い、９月29日付で、開発者側から発掘調査の依頼が市教委に提出され、10月４日付けで、開発者側と市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長中澤四郎）の間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を10月11日から開始した。

なお、本調査地点に隣接する昭和36年に発見された岩井遺跡（「岩井西の平遺跡」、岩井874番地付近）は、現在の遺跡名称基準に照合すると、本報告の「西ノ平遺跡」に含まれる。

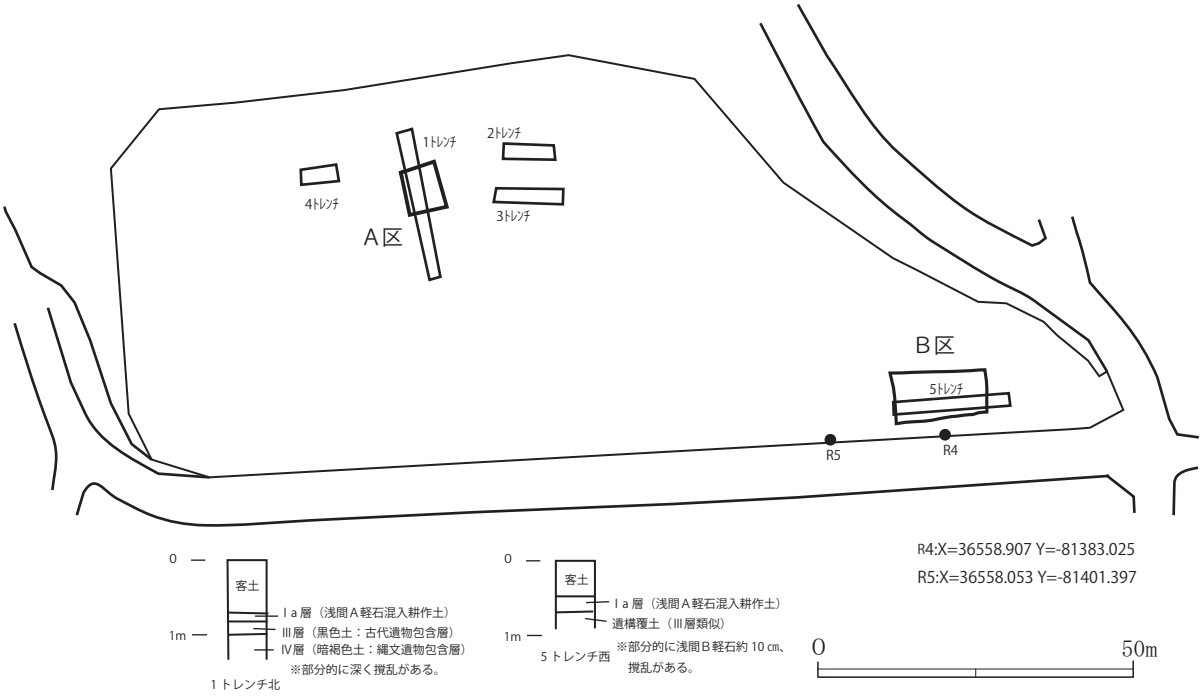
Ⅱ　調査の方法と経過

発掘調査の方法は、工事により影響を受ける浸透施設（排水処理施設）を中心に、建物建設予定地内で発見された遺構を対象とし、調査区（Ａ区・Ｂ区）を設定し、工事設計図もとに位置を記録した。発掘調査は、バックホーにより表土及び遺構確認面を掘削し、ジョレンを使用して人力で遺構確認を行い、遺構の精査を行った。遺構の重複が著しく調査範囲が狭いため、層位的に遺物の出土及び遺構の検出状況を見極めつつ、確認面の掘り下げを行った。その結果、調査によって痕跡のみの検出となった住居址も存在することになった。なお、一部の重複住居については、調査中に住居の枝番号を付けた（Ｈ－２・３号住居址）。住居址の調査は、分層16分割法で行った。精査した遺構については、写真撮影、測量（土層及び平面）を行なった。遺構測量は、平板測量により1/40で作成し、遺構の高さを記録した。土層断面図は、ビニール転写法を用いた。出土した遺物は、層位及び区毎に取り上げて記録した。

試掘調査は、平成23年７月21日・22日に実施した。調査は、建物部分に４本、浸透施設に１本の幅２ｍのトレンチを設定し、バックホーにより遺構確認面まで掘削し、人力で遺構確認を行った。建物部分とその周辺では、表土の上に客土が厚く堆積し、遺構確認面まで地表下１ｍ以上深いこと、広範囲にわたって撹乱が及んでいることが判明した。建物部分では、１トレンチで住居址１軒、２トレンチで古代の性格不明の遺構、貯留施設部分では、トレンチ一面に多数の遺構と遺物の出土を確認した。建物部分では、遺



第１図　調査位置図（1/5000）



第２図　トレンチ・調査区設定図（1/1200）

構の密度が低い可能性が推測され、工事掘削が部分的で浅いこと、盛土を多く施すこと等により、遺構への影響が少ないと判断されたため、検出された遺構についてのみ調査対象とし、他は現状保存の措置とした。貯留施設は、掘削深度が遺構面より深いため、遺構への影響は避けされないため、ほぼ全体を調査対象とし、発掘調査による記録保存を講ずることになった。

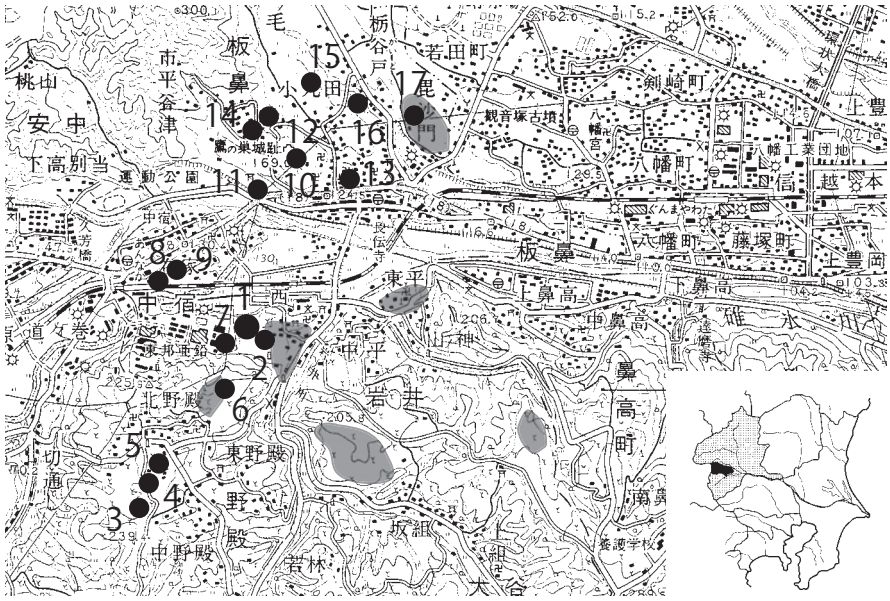
本調査は、10月11日から17日までの間実施し、住居址13軒（遺構番号は10軒）を調査した。11日に調査区の表土掘削を行い、Ａ区の住居址精査を行った。12日～14日にＢ区の住居址精査、全景写真撮影を行った。17日に遺構測量、機材の撤収を行い、発掘調査を終了した。

資料整理及び報告書作成は、発掘調査終了後、平成24年１月31日までの間、断続的に実施した。資料整理は、10月に実施し、遺物の洗浄・注記・接合・分類及び遺物台帳作成等の遺物整理、図面の修正・整理、各種台帳の整理、写真整理を中心に行った。報告書作成及び編集は、10月～12月に実施し、パソコン等のデジタル機器を使用して、図面トレース、データ集計、遺物実測・トレース、デジタルカメラによる遺物写真撮影、写真図版作成、原稿執筆等を行った。

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

西ノ平遺跡は、安中市岩井地区に所在する。本遺跡は、碓氷川下位段丘と岩野谷丘陵に挟まれた北へやや傾斜した平坦地に立地する。本遺跡の標高は、約144mである。この平坦地では、古墳時代～平安時代にかけての遺物散布地（市№501他）が広範囲に分布し、大規模な集落が存在する可能性が推定されている。本遺跡の東に位置する岩井遺跡（岩井西の平遺跡）では、奈良・平安時代の遺物が出土している（『安中市誌』1964）。野殿地区の堀谷戸遺跡では、古墳時代から平安時代にかけての集落が確認されている。岩井及び野殿地区で確認される古代集落は、古代碓氷郡の「石井郷」に関連するものである。岩井地区では、岩井西ノ平古墳群を含む多数の古墳群が分布する。碓氷川下位段丘面に存在する中宿在家遺跡では、浅間Ｂ軽石直下の水田址、中世館址が確認されている。

1 西ノ平遺跡（本報告）
2 岩井遺跡（古代集落）
3 堀谷戸遺跡（古墳～古代集落）
4 西殿遺跡（古墳～古代集落）
5 野殿北屋敷（中・近世）
6 野殿天王塚古墳（後期）
7 舘谷津館（中世館址）
8 西ノ平遺跡（古代集落）
9 岩井遺跡（古代集落）
8 中宿在家遺跡（古代水田、中世館址）
9 中宿在家Ⅱ遺跡（古代水田、中世館址）
10 板鼻城・板鼻城遺跡（縄文集落、中世）
11 鷹の巣出丸（中世）
12 板鼻古城（中世館址）
13 小丸田曲輪（中・近世）
14 古城遺跡（旧石器・縄文・古代集落）
15 海竜寺遺跡（縄文・古墳集落）
16 稲荷木遺跡（古墳土器）
17 屏風岩遺跡（終末期古墳）
主な古墳群（市内）



第３図　周辺遺跡分布図（国土地理院「富岡1/50000」）

Ⅳ　遺構と遺物

１　遺跡の概要

今回の発掘調査は、建物部分（Ａ区）で古墳時代住居址１軒、浸透施設部分（Ｂ区）で古墳時代～平安時代の住居址12軒（重複､プランのみを含む）と古代以降（覆土に浅間Ｂ軽石を含む）の土坑（井戸を含む）２基が検出された。Ｂ区の調査では、狭い範囲で住居の重複が著しいことから、遺跡が立地する平坦な台地上の広範囲に集落が存在するものと推測される。遺物は、平安時代の住居址を除き遺構の重複と住居の埋め戻しによって、住居覆土中には他時期の遺物が混在する状況であった。こうした状況により、調査では確認できなかった住居址が存在していた可能性がある。遺構覆土及び遺物包含層からは、古墳時代及び平安時代の土師器・須恵器の破片、瓦、鉄滓の他、縄文時代前中期の土器、弥生時代後期（樽式期）の甕の破片、黒曜石剥片、磨石等が出土した。

２　古代の遺構と遺物

（１）遺構

古墳時代

住居址は、Ａ区で中期１軒、Ｂ区で中期２軒、後期１軒、不明（中期か）１軒の計５軒を確認した。他時期の住居址による重複が著しく、遺存状態は極めて悪い。Ｈ－１号住居址は、平面正方形で一辺に張り出しをもつ。覆土中に大形礫が出土した。Ｈ－３号住居址は､新旧２軒の重複であることが判明した（Ａ・Ｂ）。覆土中から中期の土師器が多数出土した。Ｈ－６号住居址は、柱穴４本の位置関係、編物石集中範囲の位置関係で範囲を確認した。北側では白色粘土塊、焼土痕を確認した。本住居址の竈あるいは炉と考えられる。この遺構の左脇で確認した貯蔵穴（Ｄ－１）は、当初、本住居址に帰属させたが、その後の調査によってＨ－９号住居址に帰属させた。遺物は､床面直上で高坏の坏部（完形）と須恵器模倣坏（完形）、土師器小破片、編物石が出土した。出土状況が同じ２点の完形土器には、型式学的に時期差（中期前半と後期初頭）があり、共伴関係に矛盾が認められる。Ｈ－７号住居址は、範囲のみである。

平安時代

住居址は、Ｂ区で平安時代８軒（重複含む）を確認した。住居址は重複関係及び主軸方向により、３つのグループが存在する。Ａ群（９世紀後半）は、Ｈ－２Ａ号住、Ｈ－４号住、Ｂ群（10世紀後半以降）はＨ－８～９号住、Ｃ群は、Ｈ－２号住、Ｈ－５号住、Ｄ群は、Ｈ－２Ｃ号住で、Ａ群とＢからＤ群の間は断続し、Ｂ群以降には、それぞれに時間差が認められる。住居址の形態は、平面が小形長方形あるいは正方形となるが、プランは明確ではなく、掘り込みも浅い。竈はＨ－２Ａ号住居址を除き東中央に位置し、竈脇には貯蔵穴がある。全部の住居址に柱穴、貼床はない。竈は、Ｈ－５号住居址以外は、地山を掘り窪め、粘土で固めた簡単な構造と推定される。Ｈ－５号住居址の竈は、竈内の壁面に礫を並べ、礫で蓋をする構造である。本竈内からは、竈にかけられた羽釜、甑の他、坏、碗、瓦が出土した。貯蔵穴は、浅いものが中心で、遺物の出土はほとんどない。Ｈ－５号住居址では、貯蔵穴覆土中に２点の完形土器が出土した。Ｈ－７号住居址の貯蔵穴では、古代に二次転用した古墳時代の高坏の坏部が出土した。

（単位：m）

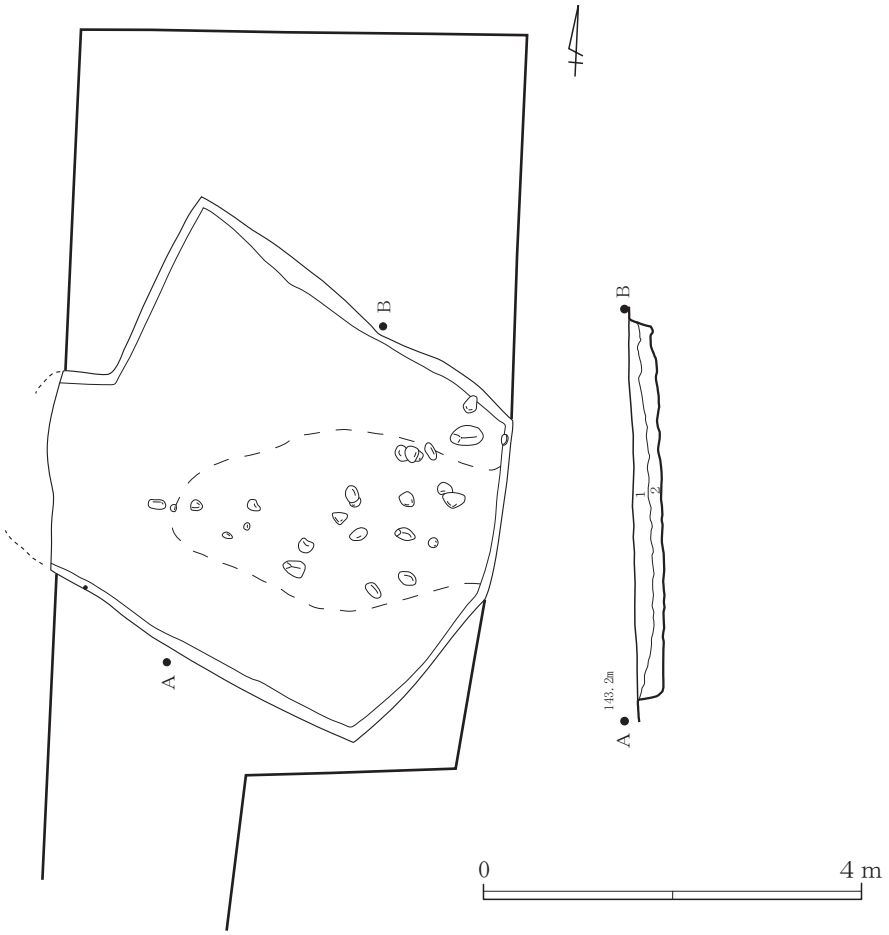
住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	土坑	主柱穴	貼床	覆土	竈・炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ			貯蔵				位置	構造		
H－1	中形長方形	4.1	4.6	〈0.3〉	×	N-32°-E	×	×	×	B	×	－	Ⅰ	覆土中に大形礫混入。張出あり。土器小破片が少数出土。
H－2A	小形正方形	3.1	3.4	0	×	S-14°-E	竈右	×	×	A	南中央	E	Ⅲ	
H－2B	長方形	－	(2.8)	0	×	N-105°-E	竈右	×	×	A	東中央(痕跡)	－	Ⅲ	H－2A住より新しい。
H－2C	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	東	－	Ⅲ	竈のみ検出。H－2B住より新しい。
H－3A	－	－	－	－	－	－	－	－	－	A	×	－	Ⅰ	H－3B住より新しい。
H－3B	－	－	－	－	－	－	－	－	－	A	×	－	Ⅰ	土師器片が少数出土。
H－4	小形長方形	2.9	(3.2)	〈0.3〉	×	N-77°-E	竈右	×	×	A	東中央	E	Ⅲ	竈周辺に土器集中。
H－5	小形長方形	(2.5)	(3.8)	〈0.2〉	×	N-116°-E	竈左	×	×	B	東中央	D	Ⅲ	H－4・10住より新しい。竈内から瓦片出土。D－1から完形土器2点出土。
H－6	中形正方形	(4.6)	(4.3)	0	×	N-10°-W	不明	4	○	A	北中央(痕跡)	－	Ⅱ	P3付近の2カ所で編物石集中。時期の異なる土師器が出土（重複の可能性）
H－7	－	－	－	〈0.2〉	－	－	－	－	－	A	－	－	Ⅰ	重複。土師器が多数出土。
H－8	小形長方形	3.2	－	0	×	N-95°-E	－	×	×	B	東中央	E	Ⅲ	H－3号住の覆土を掘り込む。
H－9	小形正方形	(3.2)	(3.2)	0	×	N-96°-E	竈右	×	×	B	東中央(痕跡)	－	Ⅲ	H－6号住より新しい。D－1は貯蔵穴（土師器高坏転用）。
H－10	小形長方形	(2.4)	(3.2)	〈0.1〉	×	N-92°-E	×	×	×	B	東中央(痕跡)	－	Ⅲ	H－4号住より新しい。H－4号住の6～8区は本住居出土遺物。

凡例　規模の（　）は推定値。〈　〉は残存値。
A：自然堆積（土砂）＋埋め戻し（ローム混入）
B：自然堆積（土砂流入）
Ⅰ期：古墳中期　Ⅱ期：古墳後期
Ⅲ期：平安

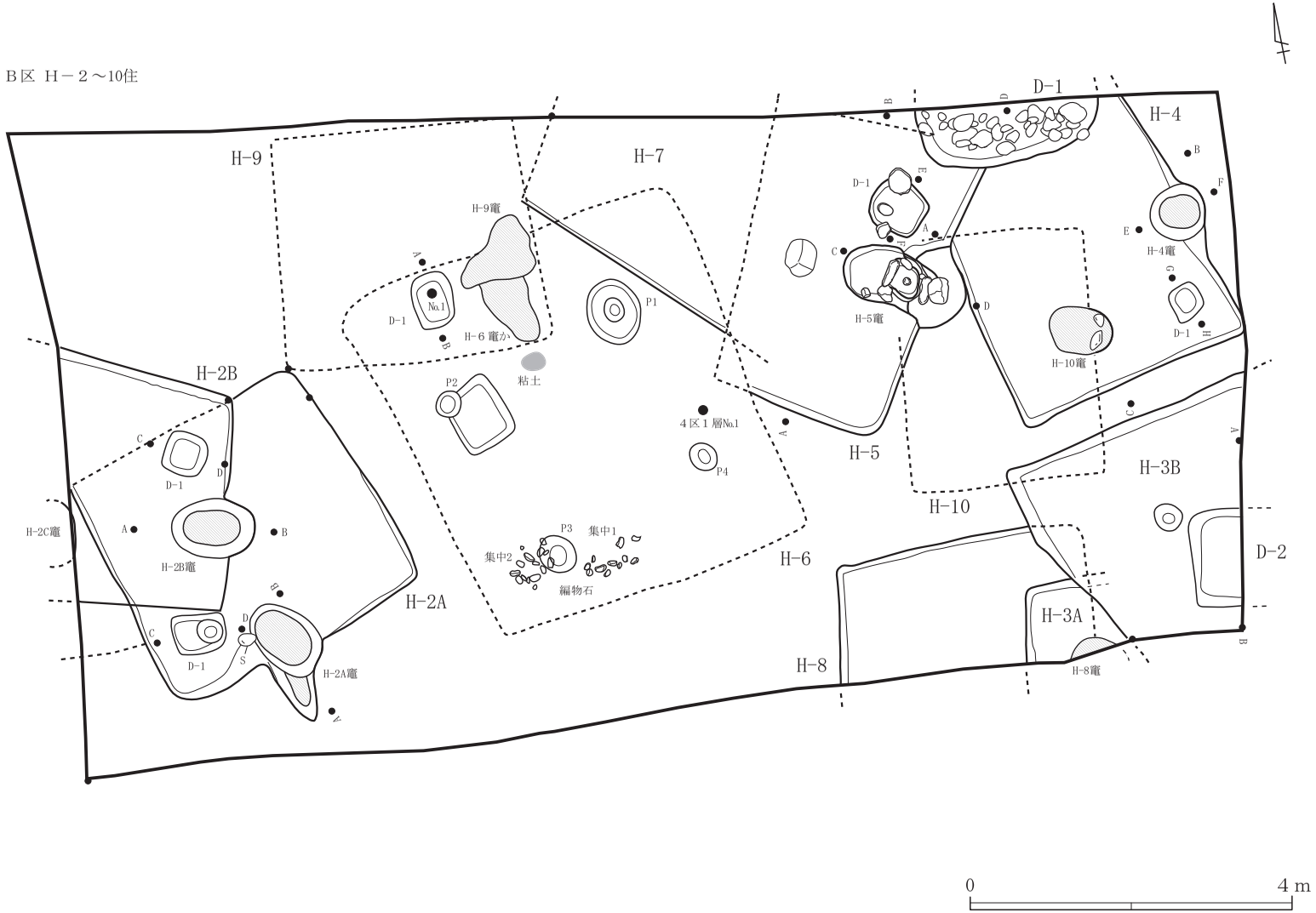
平面状態　大形：6m以上　中形：4～6m　小形：4m以下
竈構造　A：ローム＋黒色土　B：ローム＋黒色土＋袖芯河川礫
C：ローム＋黒色土＋河川礫　D：地山削り出し＋ローム＋袖芯河川礫
E：地山削り出し＋ローム＋袖粘土

第1表　住居址観察表

A区　H－1住



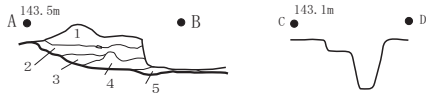
第4図　A区（H－1号住居址）全体図



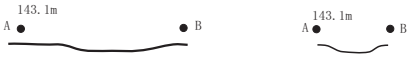
第５図　Ｂ区（Ｈ－２～10号住居址）全体図

住居・竈・土坑断面図

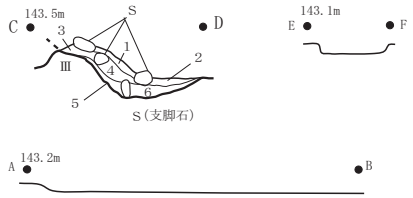
H－２A号住



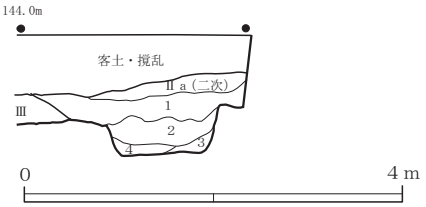
H－２B号住



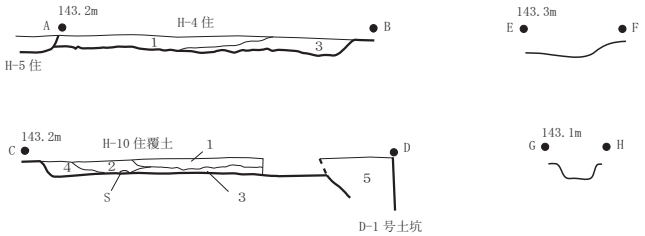
H－５号住



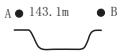
D－２号土坑



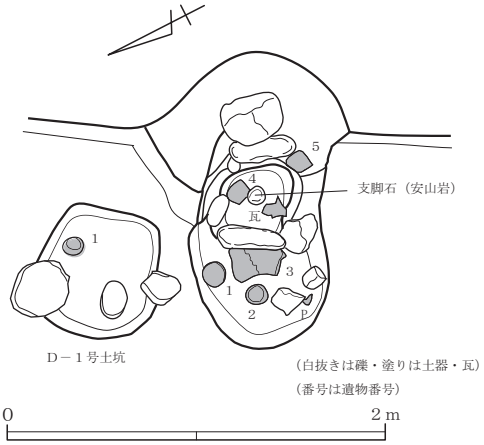
H－４号住



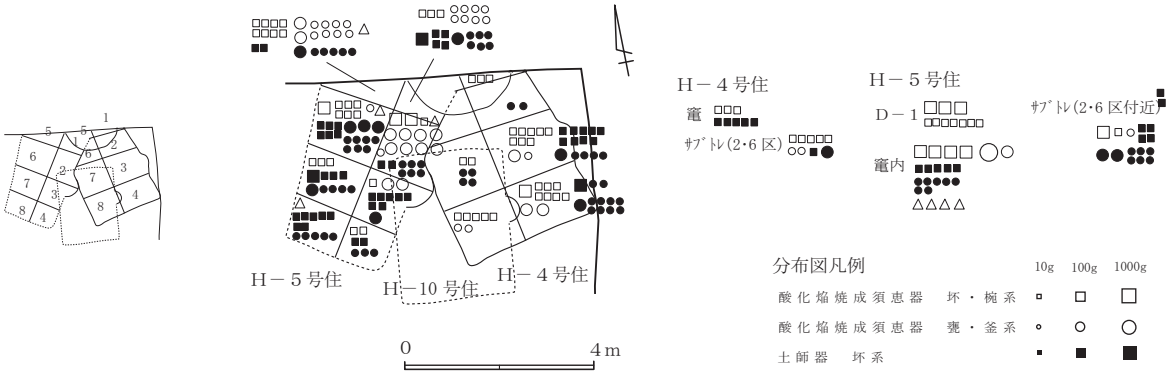
H－７号住



H－５号住　竈微細図



H－４・５号住遺物分布図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	As-B	備考
H－１号住	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	×	×				
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	×				
H－４号住	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×	×	※		
	2	暗赤褐色土層5YR	1＜2	○	○	△	×	×	※	△		
	3	暗褐色土層10YR	3＜1	○	○	※	×	×	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	4＜3	○	○	※	×	×	×	×		
D－１号土坑	5	鈍い黄褐色10YR	3＜5	△	△	×	×	×	×	×	◎	大礫混入、井戸か
竈	覆土	暗赤褐色土層5YR		○	○	※	×	×	※	△		
H－５号住	覆土	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×	※	※		
竈	1	暗赤褐色土層5YR		○	○	※	×	×	※	△		
	2	暗褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	※		
	3	赤褐色土層5YR	1＜3	○	○	△	×	※	※	○		
	4	暗赤褐色土層5YR	1＜4	○	○	△	×	×	※	△		
	5	暗赤褐色土層5YR	5＜4	○	○	△	×	×	※	△		
	6	暗赤褐色土層5YR	6＜4	○	○	△	×	×	※	○		
D－１	覆土	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×	※	×		土器２個体
D－２号土坑	1	鈍い暗褐色土層10YR		○	△	×	×	×	※		○	
	2	鈍い暗褐色土層10YR	1＜2	○	△	×	×	×	※		△	
	3	鈍い暗褐色土層10YR	3＜2	○	△	×	×	×	※		△	
	4	鈍い暗褐色土層10YR	3＜4	○	△	×	×	×	×		△	

第６図　Ｂ区住居址実測図

土坑は、覆土に浅間Ｂ軽石を含む２基を確認した。Ｄ－１号土坑は、多数の大形礫が廃棄されたもので、調査の都合、土坑底面まで至らなかったが、１ｍ以上と深く、形状から判断して井戸の可能性が考えられる。

（２）遺物

古墳時代では、中期（５世紀前半・後半）の高坏、後期（６世紀前半）の須恵器模倣坏・高坏、時期不明の土師器片が多数出土した。Ｈ－６号住居址出土の編物石は、34点出土した。石材は全て安山岩で大きさの平均は、長さ102.82mm、幅56.53mm、厚さ37.03mm、重量359.5ｇである。

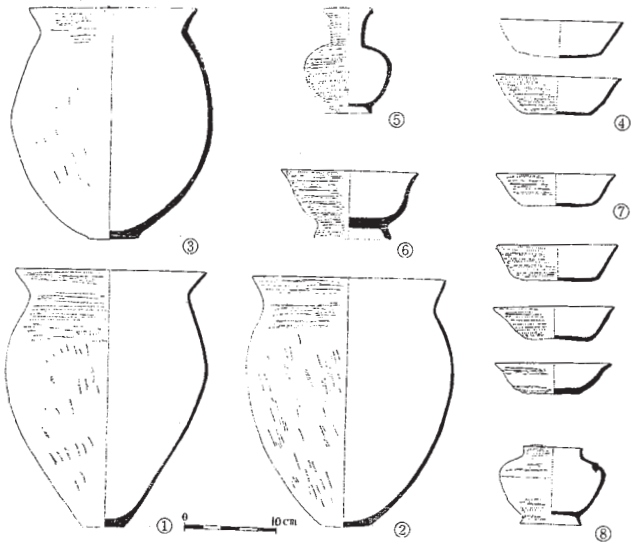
平安時代では、Ｈ－４号住居址から、９世紀後半の須恵器坏、高台付皿が出土した。Ｈ－５号住居址から、10世紀後半の酸化焔焼成須恵器の坏（土師質土器含む）・碗（黒色土器含む）・羽釜・甑・甕、灰釉土器、瓦、鉄滓（１点）が出土した。瓦は、１点を除き表裏が布目と縄目を残す平瓦である。

Ⅴ　成果と問題点

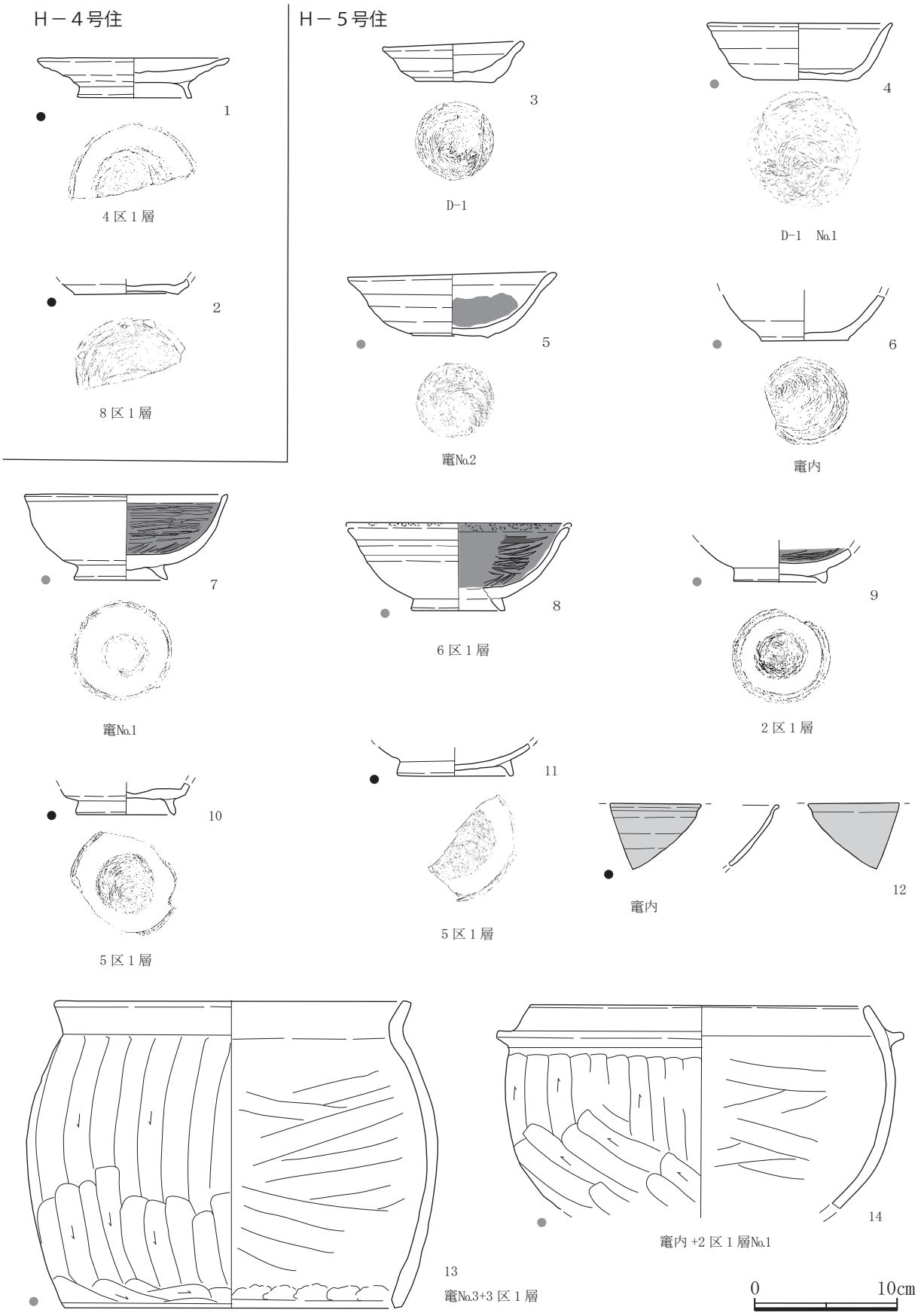
今回の調査地点は、昭和36年に発見された岩井遺跡の西側に位置する。『安中市誌』によれば、岩井遺跡では、約３m2の場所を約1.5m掘削したところから、赤土と黒土との間から多量の木炭とともに奈良・平安時代（８～10世紀）の土師器甕（①～③）、土師器（土師質土器）坏（④）、須恵器長頸壺（⑤）、須恵器高台付碗（⑥）、須恵器坏（⑦）、須恵器短頸壺（⑧）が出土したとしている（第７図参考資料）。

発掘調査では、岩井遺跡と同時期の遺構が濃密に存在することを検証し、遺跡が立地する台地平坦面上に集落が広がっている可能性を明らかにし、西ノ平遺跡と岩井遺跡は、同一集落であることが判明した。古墳時代中期の集落は、岩野谷57号墳との関連が考えられ、岩井地区での開発時期とその様相を検討する上で貴重な発見となった。また、古代では、遺跡付近に寺院あるいは公的施設が存在する可能性があることから、遺跡の立地からみて一帯が「石井郷」の中心地であった可能性が考えられる。

参考文献
森田秀策　1964 「古墳文化の時代」『安中市誌』安中市
坂口　一・三浦京子
1986 「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究』
　第24号　群馬県
大工原　豊・千田茂雄
1988 『野殿北屋敷西殿遺跡』 安中市教育委員会
大工原　豊・井上慎也・外山政子
1999 『堀谷戸遺跡』 安中市教育委員会
飯田陽一・外山政子
2001 「堀谷戸遺跡」『安中市史』第４巻
　原始古代中世資料編　安中市

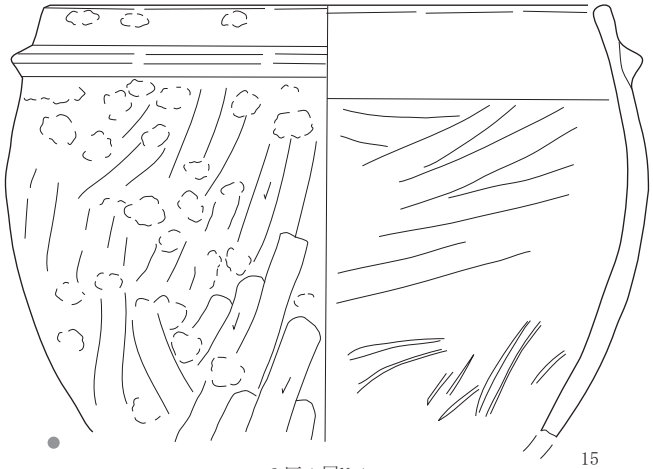


第７図　岩井遺跡出土の古代土器（『安中市誌』より）



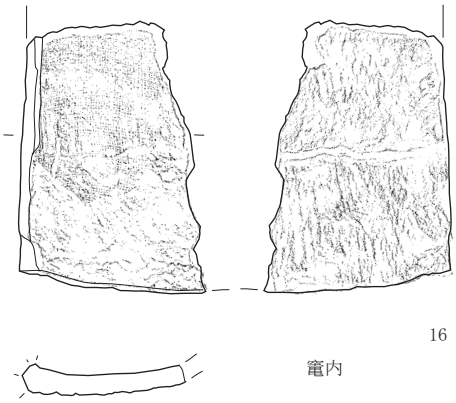
第８図　出土遺物実測図（１）

Ｈ－５号住



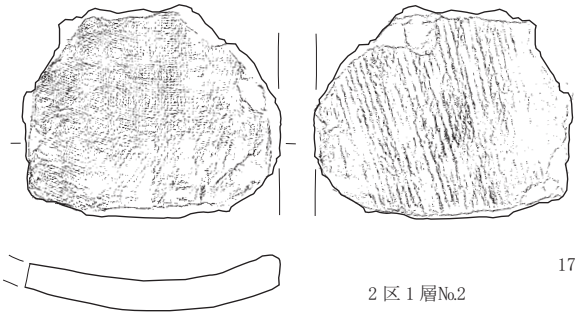
15

2 区 1 層No.1



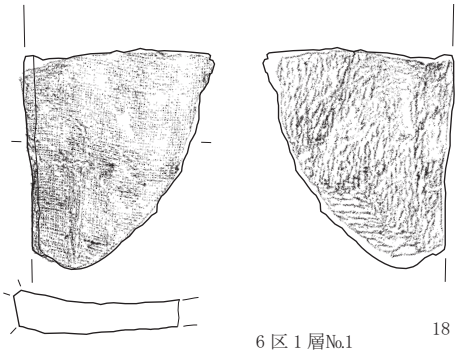
16

竈内



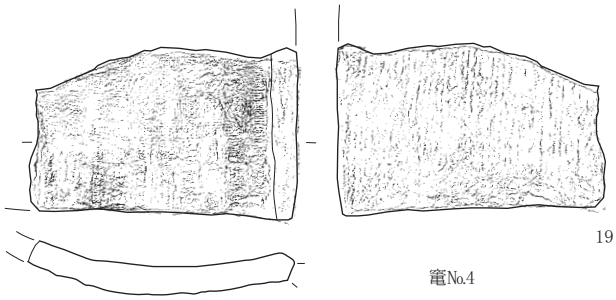
17

2 区 1 層No.2



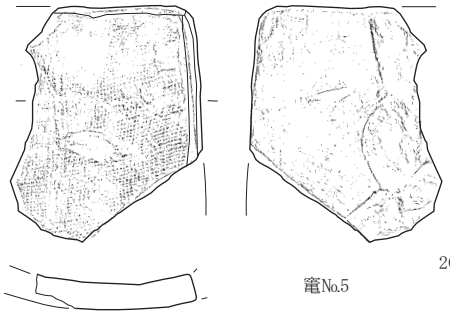
6 区 1 層No.1

18



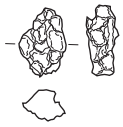
19

竈No.4



20

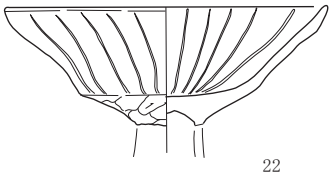
竈No.5



21

2 区 1 層

Ｈ－６号住

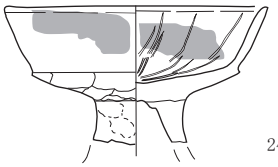


22

2 区 1 層No.1

23

4 区 1 層No.1



24

(H-9 号住 D-1)

0　10cm

第９図　出土遺物実測図（２）

H－４号住居址

番号	出土位置	器種	法量(cm)	①焼成　②色調　③胎土　④残存	成・整形技法の特徴	時期
1	4区1層	須恵器 皿	口径 (13.5) 底径　(8.0) 器高　2.8	①還元　②灰色　③白色粒　④1/3	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り・高台貼付後撫で調整。 内面　轆轤整形。	9世紀後半
2	8区1層	須恵器 坏	底径　(7.4)	①還元　②灰色　③白色粒・小礫 ④底部1/2	外面　回転轆轤。底部右回転糸切り＋底部周辺篦削り調整。 内面　回転轆轤。	9世紀後半

H－５号住居址

番号	出土位置	器種	法量(cm)	①焼成　②色調　③胎土　④残存	成・整形技法の特徴	時期
3	D-1	土師質土器 坏	口径　9.9 底径　5.5 器高　2.6	①酸化　②橙色　③黒色粒・小礫 ④完形（口縁部一部）欠損	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り無調整。 内面　轆轤整形。	10世紀後半
4	D-1№1	酸化焔焼成 須恵器 坏	口径　13.1 底径　7.6 器高　4.0	①酸化　②褐灰色、一部鈍い褐色 ③雲母・小礫多　④完形	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り＋底部周辺篦削り調整（底部広い） 内面　轆轤整形。	10世紀後半
5	竈№2	酸化焔焼成 須恵器 坏	口径　14.8 底径　5.3 器高　4.3	①酸化　②褐灰色・内面底部黒色 ③白色粒・黒色粒・小礫　④完形	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り無調整。 内面　轆轤整形。	10世紀後半
6	竈内	酸化焔焼成 須恵器 坏	底径　6.1	①酸化　②にぶい黄橙色　③黒色粒・小礫　④底部	外面　回転轆轤。底部右回転糸切り無調整。 内面　轆轤整形。	黒色土器 10世紀後半
7	竈№1	酸化焔焼成 須恵器 高台付碗	口径　14.3 底径　6.6 器高　6.0	①酸化　②鈍い赤褐色・内面一部黒色 ③白色粒・小礫　④4/5（口縁部欠損）	外面　回転轆轤。底部高台貼付後、撫で調整。 内面　轆轤整形。黒色処理・篦磨き(横位)。	黒色土器 10世紀後半
8	６区１層 サブトレ西	酸化焔焼成 須恵器 高台付碗	口径 (15.8) 底径　(6.7) 器高　(6.2)	①酸化　②鈍い橙色・内面黒色　③黒色粒・小礫　④口縁部～底部1/4	外面　回転轆轤。底部高台貼付 内面　回転轆轤。黒色処理・篦磨き（横位）	黒色土器 10世紀後半
9	２区１層	酸化焔焼成 須恵器 高台付碗	底径　6.6	①酸化　②灰褐色　③白色粒・小礫 ④底部	外面　回転轆轤。底部回転糸切り・高台貼付後底部回転篦撫で。 内面　回転轆轤。黒色処理・篦磨き（横位）	黒色土器 10世紀後半
10	５区１層	須恵器 高台付碗	底径　7.1	①還元　②灰色　③白色粒　④底部	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り後、高台貼付、底部周辺回転撫で調整。 内面　轆轤整形。底面渦巻き。	10世紀後半
11	５区１層	須恵器 皿か	底径　(8.2)	①還元（硬質）　②灰白色　③黒色粒・白色粒・小礫　④底部1/2	外面　轆轤整形。底部右回転糸切り＋高台貼付後底部周辺撫で調整。 内面　轆轤整形。	10世紀後半
12	竈内	灰釉陶器 高台付碗		①還元（硬質）　②灰オリーブ色 ③黒色粒　④口縁部破1/8	外面　轆轤整形。透明な釉薬付着。 内面　轆轤整形。透明な釉薬付着。	10世紀後半
13	竈№3	酸化焔焼成 甑	口径 (25.0) 底径 (23.5) 器高　21.5	①普通　②鈍い赤褐色　③黒色粒・白色粒・小礫・雲母　④口縁部～底部1/2	外面　轆轤整形。口縁部横撫で。胴部篦削り（縦位）。底面撫で。 内面　轆轤整形。胴部篦撫で（横位）。底面撫で。	10世紀後半
14	竈内 ２区１層№1	酸化焔焼成 羽釜	口径 (23.8) 器高 (16.8)	①還元　②橙色　③黒色粒・白色粒・小礫　④口縁部～胴部1/3	外面　轆轤整形。口縁部横撫で。胴部篦削り（上部縦位、下部斜位）。鍔貼付。 内面　轆轤整形。胴部撫で（横位）。	「東毛型」の折衷 10世紀後半
15	２区１層№1	酸化焼成焔 羽釜	口径 (29.7)	①還元　②鈍い赤褐色　③黒色粒・小礫多　④口縁部～胴部1/4	外面　轆轤整形。口縁部横撫で。胴部指撫で後篦削り（縦位） 内面　轆轤整形。口縁部～胴部撫で（横位）	「東毛型」の折衷 10世紀後半
16	竈内	平瓦	厚 1.0	①還元　②鈍い赤褐色　③礫多　④破片1/3	上面　布目痕。剥落。 凸面　単軸絡条体の縄叩き施文。 側面　篦撫で仕上げ	
17	２区１層№2	平瓦	厚 1.6	①還元　②上面鈍い赤褐色・凸面褐灰色　③小礫多　④破片1/3	上面　布目痕。 凸面　単軸絡条体の縄叩き施文	
18	６区１層№1	平瓦	厚 1.6	①還元　②灰色　③白色粒・小礫 ④1/4	上面　布目痕。 凸面　単軸絡条体の縄叩き施文（縦横）。 側面　篦撫で仕上げ	
19	竈№4	平瓦	厚 1.5	①還元　②鈍い赤褐色　③小礫 ④1/3	上面　布目痕。 凸面　単軸絡条体の縄叩き施文 側面　篦撫で仕上げ	
20	竈№5	平瓦	厚 1.4	①還元　②上面 鈍い赤褐色・凸面鈍い橙色　③雲母・小礫　④1/5	上面　布目痕。 凸面　篦撫で仕上げ 側面　篦撫で仕上げ	
21	２区１層	鉄滓	長 3.6　幅 2.5　厚 1.6　重 11.5g			

H－６号住居址

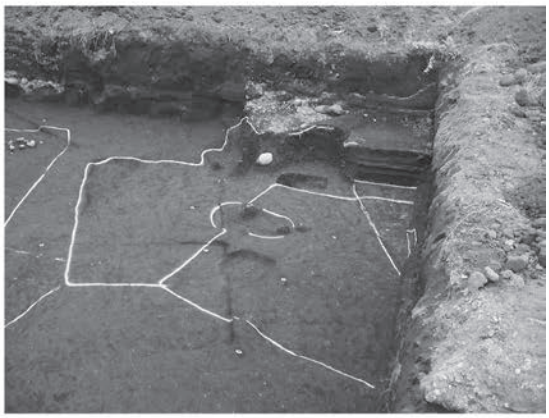
番号	出土位置	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	時期
22	２区１層№1	土師器 高坏	口径(17.0) 坏部器高 (6.3)	①普通　②橙色　③黒色粒・白色粒・小礫　④坏部完形（脚部欠損）	外面　口縁部横撫で。体部篦削り。篦磨き。 内面　横撫で。	5世紀前半
23	４区１層№1	土師器 坏	口径 14.3 器高 5.1	①普通　②橙色　③黒色粒・赤色粒・雲母(細流)　④完形	外面　口縁部横撫で。体部篦削り。 内面　横撫で。	6世紀前半 須恵器模倣坏
24	D-1 (H-9号住帰属の可能性)	土師器 高坏	口径 (13.9) 底径 (5.0)	①普通　②鈍い褐色・一部褐灰色 ③黒色粒・白色粒　④坏部完形（脚部欠損）	外面　口縁部横撫で。体部篦削り。脚部撫で。 内面　横撫で。篦磨き。底部に黒色付着物。	6世紀前半 古代に２次転用。 口縁摩滅

第２表　遺物観察表

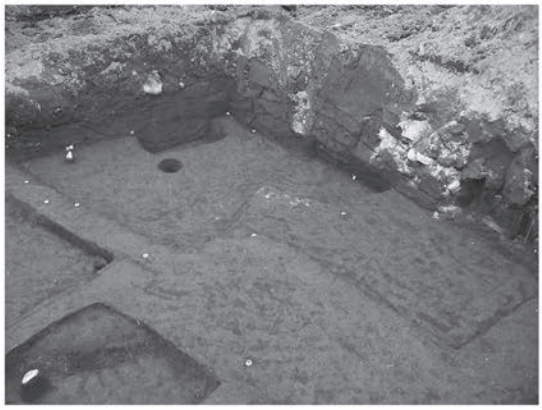
図版１

西ノ平遺跡　Ｂ区全景

Ｈ－１号住居址（Ａ区）



Ｈ－２号住居址



Ｈ－３・８号住居址・Ｄ－２号土坑

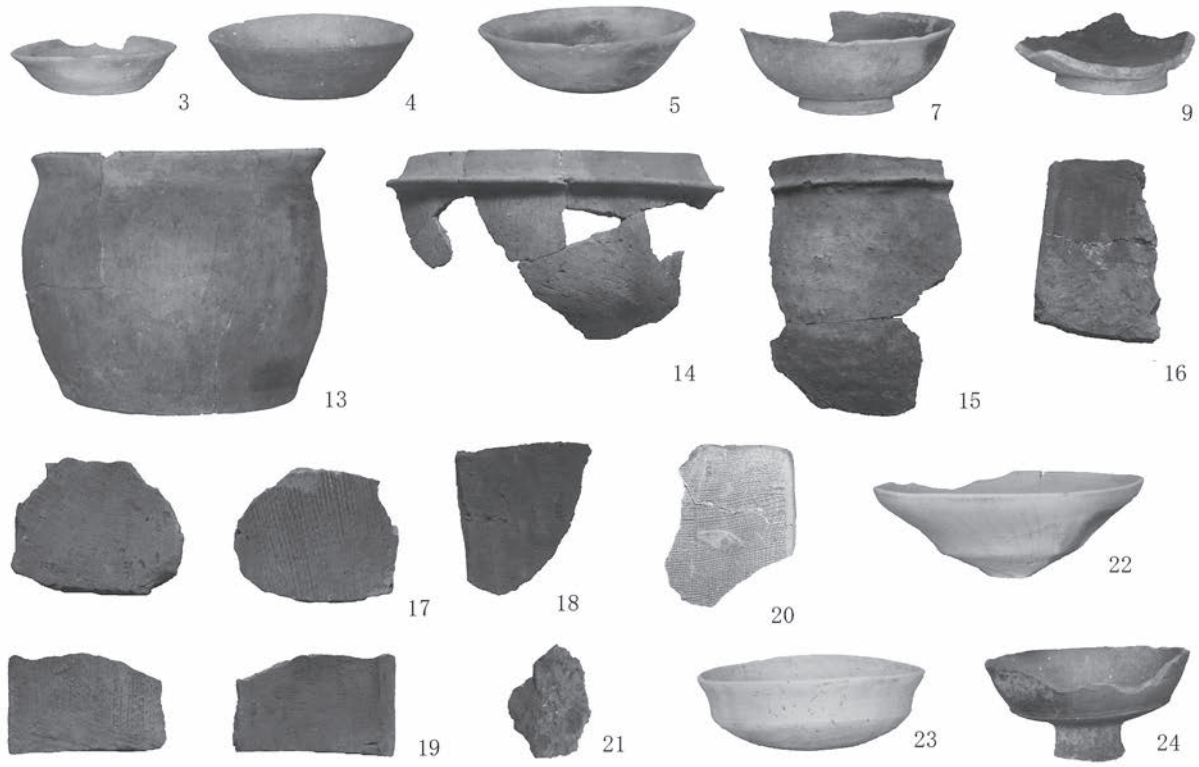
Ｈ－４・10号住居址・Ｄ－１号土坑

Ｈ－５・６・７号住居址

Ｈ－５号住居址　竈・土坑

調査地点から岩井遺跡を望む

調査風景



発掘調査報告書　抄録

ふりがな	にしのたいら　いせき
書名	西ノ平遺跡
副書名	店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	379－0292　群馬県安中市松井田町新堀245（安中市教育委員会内）　TEL 027－382－1111
発行年	西暦2012年（平成24年）１月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西ノ平遺跡（にしのたいら）	安中市字岩井字西ノ平834-1他（いわい、にしのたいら）	02113	H－4	36°19′46″	138°54′23″	20111011～20111017	160㎡	店舗建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西ノ平遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代以降	包含層 包含層 住居５ 住居８ 土坑２	前期・中期土器 後期（樽式期）土器 土師器（模倣坏・高坏・甕）・編物石 土師器（甕）・須恵器（坏・甕）・酸化焼成焔須恵器（椀・羽釜・甑・甕）・瓦・鉄滓	古墳時代から平安時代にかけての集落跡。岩井遺跡の隣接地。 平安時代の住居址竈に瓦を使用。 周辺に寺院が存在する可能性。
要約	岩井遺跡（昭和36年発見）の西側隣接地。西ノ平遺跡の発掘調査では、古墳時代と平安時代の集落を確認し、両遺跡が同一集落であることが明らかとなった。また、平安時代の住居址から、瓦が出土している点で、寺院あるいは公的施設の可能性がある。				

西ノ平遺跡

－店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行日　平成24年１月31日

編集・発行　安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市松井田町新堀245
（安中市教育委員会内）

印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67